

●ハラル畜産物の最近の動き

日本政府は、イスラム圏の国を重要な輸出の市場と考え、先日はイスラム教を国教とするカタールへの国産牛肉輸出の道をひらくなど国産農産物のハラル認証への対応を進めようとしている。

いっぽう昨年まで、鶏卵・鶏肉についてはイスラム教を国教とする地域への輸出は行われていない(表1)。

●ハラルとハラム

イスラム教で認められた物や言動をハラル(HALAL)と言う。一方、認められない物や言動はハラム(またはノン・ハラル)と呼ぶ。ハラルでない食品の代表は豚と酒であり、イスラム教徒はこれらの飲食を避ける。ハラルとハラムは食べ物だけを区別する言葉ではなく、窃盗など、神が認めない言動や習慣も総じてハラムと呼ぶ。

また、イスラム教にはナジス(不浄)という言葉がある。犬や豚、アルコールを含むものは無条件にナジスで、ナジスなものが触れたものも全てナジスになる。犬と豚以外は、糞尿や血などはナジスだが精子と卵子(鳥の卵も含む)はナジスではない。

ハラルでない食品とは、ナジスを含むもの、ナジスに触れた道具で作ったもの、健康に害のある毒物などのこと。ハラルな方法でと畜されている

表1.鶏卵・鶏肉の輸出(2013年)

鶏卵(生鮮・冷凍・加工品) (kg)	鶏肉(生鮮・冷凍・加工品) (kg)
香港	5,514,775
大韓民国	1,260,754
インドネシア	939,990
ベトナム	854,437
フィリピン	418,527
アメリカ合衆国	9,263
ニュージーランド	593
カナダ	280
台湾	650
タイ	200
インド	20

鶏卵の加工品は一部鶏以外も含む
鶏肉の生鮮・冷凍は一部鶏以外も含む
参考:財務省貿易統計

表2.代表的な認証団体と所管国

所管国	認証団体
マレーシア	Jabatan Kemajuan Islam Malaysia(JAKIM)
インドネシア	Majelis Ulama Indonesia(MUI)
シンガポール	The Majlis Ugama Islam Singapura(MUIS)
アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦(UAE)行政事務局(GSM)

これらの認証団体が指定する日本国内の認証団体がある。

ハラル表示の基本的知識

～まずは基本を理解することから～

国内の食品市場がほぼ飽和しつつあるなか、イスラム諸国が新しい輸出市場と見られている。その時に考えなければならないのがハラル表示だ。今回はハラル表示の基本的な知識をまとめてみた。

ない畜産物や、一度でも豚や酒に触れた包丁やまな板、皿で作った料理もハラムとなる。

このように、ハラルの基準は途中工程を含めた徹底的なもので、豚肉料理から豚肉をよけたものや、少しでも豚由来の調味料や豚由来のゼラチン、酵素が含まれたものは、すべてハラムである。醤油や味噌、みりんもアルコールを含むため、国によってはハラムとされることがある。

●国ごとの認証機関

イスラム圏の国は自国の認証団体を作り、そこが認証した製品を輸入している(表2)。さらにその認証団体が指定する日本の認証団体もある。つまりハラル認証をとって商品を輸出するには、相手国に応じて国内の認証団体を選定し、その審査と認証を受ける。

また、輸出の認証とは別に、日本国内の飲食店向けのハラル認証もあ



る。これはインバウンド認証と呼ばれるが、多くの認証団体がありレベル差があるので注意が必要である。

●鶏肉と鶏卵のハラルについて

鶏肉については、食鳥処理場の設備や処理方法が問題になる。処理場にはイスラム教徒の作業者を置く必要があり、少なくとも首を切る役目はイスラム教徒が行う必要がある。その他の作業は認証団体に正確に確認をしよう。毎日のお清めや礼拝への配慮もしたい。

また、飼料に含まれる豚由来の原料も問題になるので、飼料メーカーに確認したい。現場に応じさまざまな課題があるので、認証団体には、関係ないと思った情報でも前広に開示し、見解を聞き取るべきである。

いっぽう、卵はハラルなので認証を受けなくてもイスラム圏に輸出できる。しかし認証を受けてハラル鶏卵を作り、信頼性や商品性を高めたい場合は団体に相談すると良い。

ハラルはイスラム教徒の大切な信仰である。文化を理解、尊重する姿勢で、取り組みの目的を明確に持ち、最適な認証団体の意見をしっかりと聞いてメリットを見極めて進めたい。

冬季を迎えるにあたっての注意点

～妊娠母豚の給与量調整～

四季のある日本では、豚の飼養管理においても季節の影響を大きく受ける。特に、個体ごとに飼料給与量を調整し、体型をコントロールする必要がある母豚については、季節に応じた飼養管理が重要だ。そのなかでも、今回は秋口から冬における妊娠豚の管理について考えてみたい。

●季節で異なる母豚の体型

図1は、ある農場において、分娩前P2点背脂肪厚を母豚が交配した季節で分けて示したものである。これを見ると、秋季(10月-12月)に交配した母豚は2月から4月に分娩することになるが、分娩時の背脂肪厚がほかの季節よりも薄くなっていることがわかる。

これは、①夏季に受けた暑熱ストレスにより消費している。②妊娠期間に本格的な冬を迎え、体温を維

持しようと多くのエネルギーを必要とするために脂肪が十分に蓄積できていない、といったことが主な理由として考えられる。なかでも、夏場の消耗を大きく受けて痩せた母豚に交配を行う際の対応が重要になってくる。

●夏場の影響を大きく受けた母豚の早期回復

図2は10月から12月に交配を行った母豚のなかで、夏場の影響を大きく受け、痩せた個体(交配時の背脂肪厚が14mm以下)を抜粋したものである。これを見ると、青の線で示した「対照区」は、本格的な冬を迎える妊娠中期(妊娠30日目~90日目)以降から給与量を増や

図1.季節別の分娩前背脂肪厚

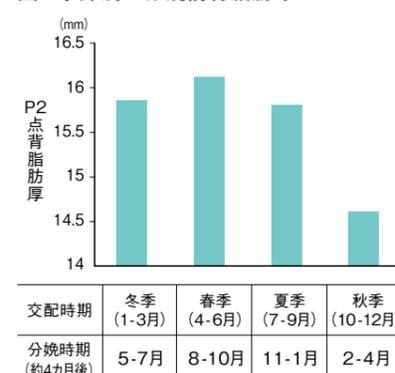
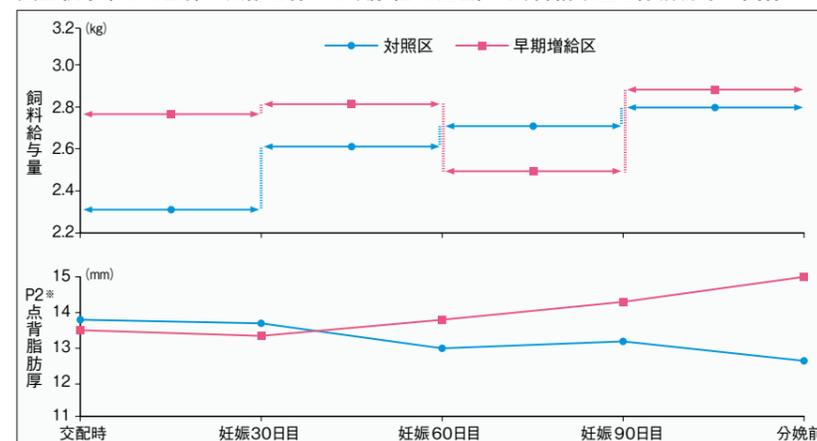


図2.秋季(10-12月)に交配を行った母豚(2-6産目)の飼料給与量と背脂肪厚の関係



※ P2点背脂肪厚 最後肋骨位の背中線から左右に6.5cm離れた位置の背脂肪厚。リーンメーターで測定する

しても、分娩前に背脂肪が蓄積していない。

一方、赤の線で示した「早期増給区」は妊娠前期から給与量を増やしており、妊娠30日以降から背脂肪が蓄積して母豚が回復している。加えて、生まれた子豚の体重も対照区と比べて大きくなっている(表)。このように、夏の消耗を受けて痩せている母豚の給与量調整は、非常に大切である(写真1)。

痩せている母豚を秋口に交配して分娩までに体型を回復するためには、妊娠中期以降、つまり本格的な冬を迎えてから給与量を増やしても間に合わない。そのため、安定期に入る妊娠14日目以降である今の季節から速やかに給与量を増やすことが大切だと言えるだろう。農場内で痩せている母豚を確認し(写真2)、早く体型を元に戻せるよう、飼料の給与量を見直してほしい。

写真1.母豚の飼料給与量調整



写真2.リーンメーターによる背脂肪厚測定

